

令和6年度

# 修士論文要旨録

第33号



2025年3月

琉球大学大学院教育学研究科(修士課程)

# 目 次

## 教科教育専攻 人文社会教育専修 社会科教育領域

|                                                                                                                                                                                                                 |           |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|
| 沖縄の子ども・若者の社会的包摂にユースワークは有効か<br>—ケア的視点を踏まえた「場」づくりの実践を通して—<br>Effectiveness of youth work for social inclusion of children and youth in Okinawa<br>—Practice of creating a “place” based on a careful perspective— | 石橋 柚里 … 1 |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|

# 沖縄の子ども・若者の社会的包摂にユースワークは有効か

## —ケア的視点を踏まえた「場」づくりの実践を通して—

Effectiveness of youth work for social inclusion of  
children and youth in Okinawa

—Practice of creating a “place” based on a careful perspective—

教育学研究科教科教育専攻

人文社会教育専修 石橋 柚里

沖縄県が実施した中学卒業後の進路未決定者や高校中退者への調査において、将来への期待について「特になし」と「未回答」が計 44.8%であった。平成 28 年、沖縄県の子どもの貧困率が 29.9%と全国の約 2 倍であることが明らかになって以来、官民間問わず是正に向けて様々な取り組みが行われてきた。しかし、この調査結果は、不利が集中した子ども・若者が、自分の将来に期待が持てないという状況を作った社会に対し、改めて課題を突きつけている。

湯浅は、貧困の背景に「五重の排除」があることを示し、五つ目の排除として、「自分自身からの排除」をあげる。「自己責任論によって『あなたのせい』と片づけられ、さらには本人自身がそれを内面化して『自分のせい』と捉えてしまう場合、人は自分の尊厳を守れずに、自分を大切に思えない状態にまで追い込まれる」とを説明する。また、中西は、格差（スクール・カースト）や排除（いじめ）にみられるように、社会的排除が日々の関係性にまで及ぶなか、自己責任の回路が繰り返しくられてきたことを指摘する。繰り返しくられる自己責任の回路により「自分自身からの排除」が生じ、子ども・若者の「生きづらさ」としてあらわれてきたのではないか。

子ども・若者支援の課題として南出は、構造的な要因には手をつけず、「社会適応」に向けて個人の努力を促す「支援」に課題があると指摘する。こうした課題に対し平塚は、若者期の保障の一環と位置付けるユースワークの「場をつくる」実践の価値に着目している。子ども・若者の一人ひとりの「個」としての尊重と信頼関係を土台としたユースワークの「場をつくる」の実践が、子ども・若者の社会的包摂に有効なのではないだろうか。また、「場をつくる」実践において、学習支援の実践で得られた気づきから、相互依存の社会を展望として持つ、ケア的視点を踏まえることを強調する。本研究では、一般社団法人ひるぎ舎における「場」づくりの実践と分析を行い、ケア的視点を踏まえたユースワークが、沖縄の子ども・若者の社会的包摂に有効か明らかにすることを

試みた。

第一章では、学校からの排除、学校のシステム構造による排除、経済的貧困による排除、自然な移り行きによる排除、地元社会からの排除、沖縄の行財政の構造による排除など、様々な排除の実態があること、また、重なる社会的排除の末に、「自分自身からの排除」に陥ることが、子ども・若者の生きづらさの実態であることを示した。社会的排除の威力が日々の関係性にまで及ぶなか、若者バッシングの典型である、コミュニケーション能力、社会性の欠如などの基準が、さらに自己責任の回路を繰り返しつくり出し、「自分自身からの排除」に繋がってきた。子ども・若者支援として、学習支援事業や居場所における取り組みが、子ども・若者の関係資源の創出になるなどの成果がみられる一方で、子ども・若者支援の在り方が、「社会適応」に焦点化された、個人の努力を促すものであり、繰り返し自己責任に還元される在り方として課題が見られた。さらに、成果を追求する課題解決型の支援では、成果が期待できないものが排除される可能性があること、就労自立を促す支援の在り方では、困難さに必要とされる関係資源の配置は難しく、子ども・若者の日常と地続きにある支援の必要性について明らかにした。

第二章では、子ども・若者支援の課題に対し、若者期の保障として位置づけられるユースワークに着目した。ユースワークも新自由主義やグローバリゼーションの影響を受けながら、その価値が問い直され続け、共通基盤が模索されてきた。IDYWの「ユースワークの基礎」は、社会情勢の変化に伴う揺らぎのなかで、ユースワークの価値ある要素として示されたものである。その要素として、開かれた場であること、若者の個の尊厳の重視、自主性の重視、互いに理解し合うこと、パワーバランスを追求、ユースワーカーの存在価値の認識などが示されてきた。個の成長の媒介となる場と関係性の保障を社会へ迫り、若者が求める社会の在り方を模索し、社会システムに働き掛ける意味で、ユースワークの「場をつくる」実践に意義があると言える。

また、ケアがより公正で平等な社会の在り方の追求として、連帯を育む、相互依存の社会の在り方を展望に持つことから、社会システムに働きかけるユースワークにおいて、ケア的視点を強調することに価値を見出した。ケア的視点を踏まえるユースワークの具体性を明らかにするため、「ユースワークの基礎」を参考にし、「『今、ここ』にいる価値を大切にし、注意を払うこと」「互いへの敬意や信頼しあえる関係性」「若者たちの仲間関係やアイデンティティを広く共有しながら活動し、それぞれの人生選択や未来の可能性にとって重要

なもの（階級やジェンダー、人種、セクシュアリティや信仰など）を互いに理解しあうこと」「若者の利益となるような、パワーバランスの追求」について、ケア的視点でとらえ直した。

第三章では、一節二節で、ユースワークの視点をもとに、筆者が勤めた珊瑚舎スコーレの学習支援の実践の位置づけを行った。三節では、相互依存の社会の在り方を展望に持つ、ユースワーク実践に価値を置き、以下の4つの要素を取り入れた、ひるぎ舎の「場」づくりの実践を分析した。1、将来に向け「今」必要とされる個々のケアが「場」全体でなされること 2、多様な子ども・若者が互いに理解し合い、ケア的な関わり合いが可能となる「場」であること 3、子ども・若者の自主性を支える「場」であること 4、「場」づくりで求められるワーカーの専門性が価値として共有されることである。

ひるぎ舎では、緊急性が高い困難さを抱える場合であっても、「場」全体で、ケア的な関わりが継続できる方法を模索し、運営している。これは、既存の支援機関ではつながりにくい子ども・若者であっても、ケア的な関わりで伴走しながら、つながりを創り続けるものだと言える。抱える困難さが複雑で、潜在的なニーズが見えにくいほど、彼ら彼女らの「今」必要とするケアが不在になり、大人の考える在り方に規定されかねない。しかし、ひるぎ舎の実践では、他のメンバーとのつながり、「場」全体との関わりも見据えつつ、「今」必要とするケア的な関わりを作り、そこを関係の基礎としている。また、ひるぎ舎の「場」では、こうした多様な困難を抱える、多様なメンバーが、ともにいられる「場」となっている様子が見られた。メンバー同士が、個々の持つ異質さを排除するのではなく、理解し合いながら、ケア的な関わり合いをもつ姿である。上述した4つの要素を踏まえた「場」づくりの実践は、個々のケアが「場」で保障されることで、メンバー同士の関係が創られ、関係性が育まれていた。

さらに、イベントを通して、やりたいことを実現する「場」として、メンバーの自主性を尊重することで、個々の発達段階に必要な体験や時間が保障されるものとなっていた。また、屋台出店等のイベントでは、メンバーのアイデアや工夫、努力が成果として表れたときに、メンバーの姿に変化がみられることから、自主性が支えられる「場」のなかで、個の成長プロセスの支えになっていると言えるだろう。そして最後に、こうした「場」は自然発生的に起こっているのではなく、個々のケア的な関わりや、「場」におけるメンバーへの働きかけなど、関係が創られる「場」にしていくためのワーカーの専門性が非常に重

要である。こうしたワーカーの専門性が低く見積もられることなく、ひるぎ舎のなかで、その価値が共有されることで、「場」が継続できる運営になっていると言える。また、メンバーに見られるケア的な関わり合いは、連帯を育む素地としてみることができる。このように、若者と大人、若者同士の間につながりが創られることで、若者と社会の媒介となる「場」が創られていると言える。これは、複雑な困難さを抱える子ども・若者にとって、必要な関係の創出が困難な現在において、意義のあるユースワーク実践と言えるだろう。

三章で示した、四つの要素を踏まえた「場」づくりの実践は、個々のケアが「場」で保障されることで、メンバーの変化から見られるように、関係性を育む「場」になっていった。相互依存の社会の在り方を展望にもち、若者と大人、若者同士、若者と社会につながりを創ることを明らかにした。主題に対する結論として、ケア的視点を踏まえた「場」づくりの実践は、子ども・若者と社会のつながりを創造するという点で、社会的包摂に有効であると言える。

課題として、具体的に取り上げた実践以外にも、ひるぎ舎の「場」づくりとして様々な実践が重ねられてきた。その中には、メンバー同士やワーカーとの関係性が育まれる「場」を検討するうえで、重要な実践が埋もれていることが考えられる。「今、ここ」を生きる子ども・若者の関係性が育まれる「場」を創り続けるためにも、分析がなされていない実践の分析や検討が必要である。

（指導教員：山口 剛史）